〈青森県史〉の窓 212

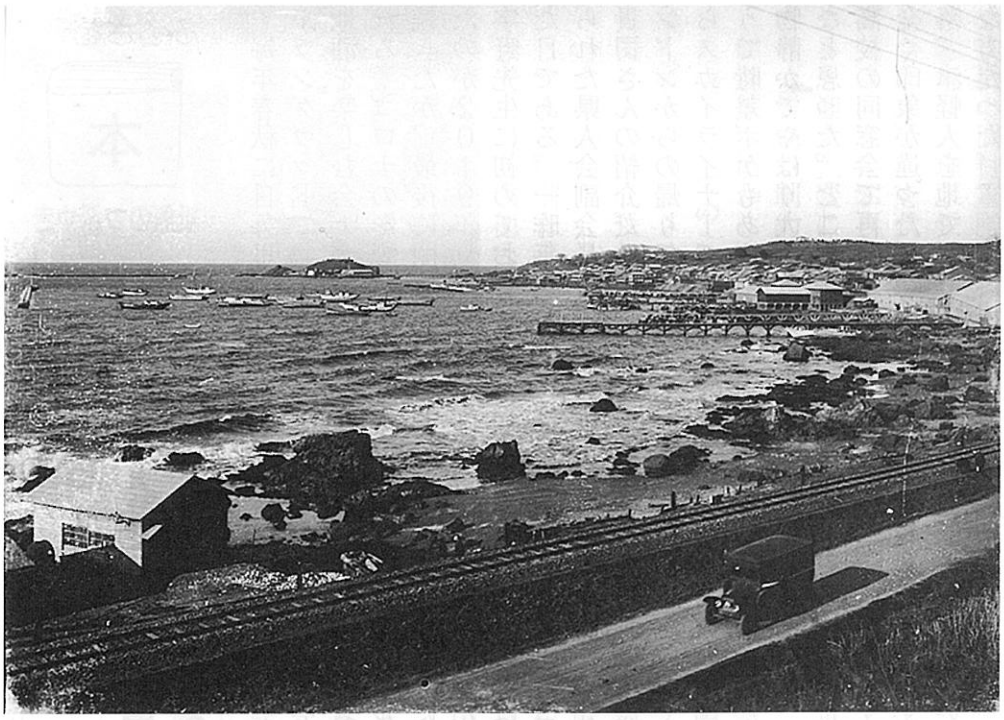
遠山家日記に見る 鮟港の修築

小池 祐賀子
（八戸市立図書館歴史資料グループ 主事兼学芸員）

このたび、八戸市立図書館より『八戸藩遠山家日記』の最終巻、第11巻が刊行となった。

「遠山家日記」とは、八戸藩の上級武士である遠山家の歴代当主が、1792（寛政4）年から1919（大正8）年の127年にわたって書き継いだ日記である。これは全国的に見ても類がない貴重な史料として、2016（平成28）年に青森県重宝（歴史資料）に指定されている。

本書には、1908（明治41）年～1919（大正8）年の6冊の日記を収録した。筆者は、10代当主の景三（かげみつ）である。近代の八戸には、憲政会系の土曜会と政友会系の公民会との二大政治勢力があった。後者は奥南派とも呼ばれ、景三はその中心的存在だった。



修築中の鮟港＝大正～昭和初期・八戸市立図書館所蔵

1919（大正8）年には青森県議会の議長を務めるなど八戸を代表する政治家の一人といえる。

八戸市といえば、全国有数の水産都市である。この発展の礎となった八戸港（当時は鮟港）の修築に、景三が大きく関わっていたことが「遠山家日記」から読み取れる。

藩政時代より豊かな漁場を形成していた鮟港であるが、大型船が着岸する防波堤が未整備で、船の出入りが天候に左右されてしまうことから、港湾整備は長年かつ急務の課題だった。

これは青森港築港、岩木川改修と並ぶ青森県の三大土木事業といわれていた。修築には巨額の費用がかかるため、補助を得なければならない。この課題に立ち向かうべく、1918（大正7）年に鮟湾漁港修築期成同盟会が発足した（「遠山家日記」4月7日条）。

これには1000人もの地元の政財界関係者が集まったという。発起人の一人である景三は、早速青森へ行き、県知事に陳情している（同月15日条）。八戸町役場において幾度も協議会を開き、6月に再び県知事を訪問した（6月24日条）。8月には上京し、土曜会の奈須川光宝（なすがわみつとみ）（当時の八戸町長）・神田重雄（かんだしげお）（のちの2代目八戸市長）と共に内務省土木局や農商務省水産局へ陳情に出向いた（8月6～8日条）。

このように、国と県の双方に働きかけを行なっていた様子がうかがえる。そして遂に12月17日の県会で、総費用120万円のうち60万円を国庫補助、もう半分を県で負担することが決まったのである。

この年の9月には立憲政友会の原敬内閣が発足し、地域振興を推し進めていた時期であった。政治的に有利に進めるため、神田ら憲政会（土曜会）のメンバーが一斉に転じて政友会へ入党するという動きがあった。八戸町（現八戸市）の政治家が党派を超えて一丸となったことで、長年の悲願が達成されたといえよう。

1919（大正8）年11月10日、鮟港の起工式が盛大に行なわれた。景三は県議会議長として参列し、「本港修築は、単に漁港たるの利用に止まらず、運輸交通の中心として将来一大市街を形成し、地方産業の進展に資する所大なるべきを信ず」と祝辞を述べた（「東奥日報」11月11日条）。まさにこの言葉の通り、現在の八戸市は海から拓け、海と共に発展を遂げてきたといえるのである。

『東奥と青森』661号
東奥青森の会 2023年5月号